

# 『日本書紀』の室町期受容と『世界』

——日本書紀抄とキリシタン資料より——

小林 千 草

## 一 はじめに

室町期における『日本書紀』神代卷受容に関しては、恩師大塚光信先生のお勧めもあり、一九六六年より「抄物」——「日本書紀抄」を中心に書誌的・国語学的考察を開始し、その後、神道史学の西田長男博士とも交流の機会を持った。筆者の考察結果は、

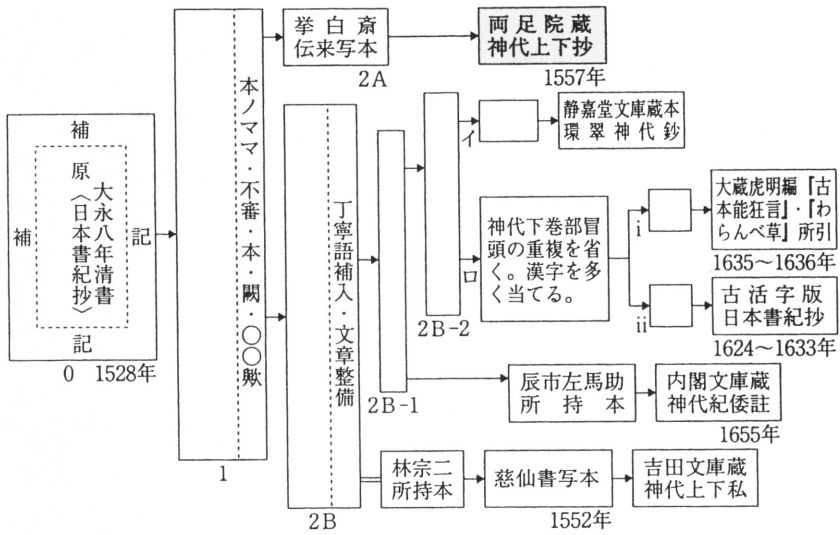
- A 『日本書紀抄の国語学的研究』（一九九二年五月清文堂刊<sup>①</sup>）
- B 『中世のことばと資料』（一九九四年十一月武蔵野書院刊<sup>②</sup>）
- C 『清原宣賢講「日本書紀抄」本文と考察』（二〇〇三年三月勉誠出版刊）
- D 『中世文献の表現論的研究』（二〇〇一年十月武蔵野

書院刊<sup>③</sup>）を通しておりおりに公表してきたが、本論では、それらに基盤を置きつつ、新たな視点を導入したいと思う。

## 二 清原宣賢講『日本書紀抄』における能・狂言など芸能に関する言及より

建仁寺兩足院蔵『日本書紀抄』（二冊）は、清原宣賢（二四七五～一五五〇）が『日本書紀 神代卷上下』に関して大永七年（一五二七）～大永八年（一五二八）に講義したものの聞書と推定される（A・B・C参照）。成立過程を主要な異本とともに図示すると、〈図1〉のようになる。清原宣賢は、実父吉田兼俱（一四三五～一五一二）の抄物や一条兼良（一四〇二～一四八二）の『日本書紀纂疏』など先行注釈書をもとに自らまとめなおした講義手控〈先

〈図 1〉



(A372 頁、C308 頁より)

- 抄本<sup>①</sup>（後抄本）に依拠しつつ、講義を展開しており、筆録された聞書には、それら先行抄の引用・和らげ<sup>やわ</sup>がかなりの分量を占める。しかしながら、吉田兼俱の主唱する吉田家説と一条兼良の解釈との相異については慎重に諾否を論ずるなど、清原宣賢でなければ介入できない部分にも踏みこみ、また、兼俱や兼良が注目しなかった点についても、学者としての総合的目くばりを行なっている。つまり、講義者としての宣賢の主體的活動を随所に認めることができる。それらの中には、能・狂言など芸能に関する言及があり、宣賢自身のその方面への深い造詣を認めることができる。
- ① 俳優ハ侏儒ト云ホトニテクバツ申樂ナトノヤウニ御クルイ有タソ（一六七ウ）<sup>⑤</sup>
  - ② 繩ヲハル心ハ境ヲ乱テ日神ノ御田ヘムケテハリ入ル、ソ是ハ能ノ芝居<sup>シバ</sup>ナトニ繩ヲハル心ソ（一七1オ）
  - ③ 云々 申樂ノ能ノ本ニ云ト同ソ 云ハ雲ソ 雲ノヤウニ多コトヲ略スルヲ云ソ 疑タヲ云ト云義ハ悪ソ（一七2ウ）<sup>⑥</sup>
  - ④ 仮<sup>カ</sup>辰<sup>チ</sup>ト云ハカリニシタ家ソ 展ハ玉篇ニ閣也ト注シタホトニ能ナトミル時ノサシキソ（一七7オ）
  - ⑤ 尾ヲキル時十束ノ劔ノ羽コホレタソ 能ニスルニヨクアウタソ（一七7ウ）
  - ⑥ 申樂ノ近江フシ大和フシナト云モ是ソ（二19ウ）
  - ⑦ 皇孫何処——申樂カ伊勢ヤ日向ノ神也ト誓ヒハ同シカ

ヘシト云ハコ、ノコトソ 別ニ仰ラル、方カアルハ悪ソ  
(二23ウ)

⑧能ノ芝居ノヤウニソ 大嘗会ノ時南門ニ盾戈ヲ立ル 是  
カ神代ノ遺風ソ (二26オ)

⑨俳優——申樂ノ時ヲカシ云ヲ云ハ狂言ソ 兄ナレ共悪心  
ヲホトニ主ニエ御成リナカツタソ (二40ウ)

⑩俳人ハヲカシスル物ノコトソ 前ニアルソ (二46ウ)

「申樂」は、「①中古から中世にかけて、即興のこっけいな物まね言葉芸のこと。わが国古来のこっけいなわざに、唐から伝わった散樂が加味されてできたもので、散樂が転訛して「猿樂」となった。相撲の節会や内侍所の御神樂の夜などの余興として、臨時に工夫して演じられたりした。」(『日本国語大辞典』第二版)のごとき歴史を有して登場したものである。それが、「②①が民間に移り、中古から中世にかけて、寺社に所属する職業芸能人が、祭礼の際などにこっけいなわざや曲芸を演ずる芸能。中世に入つて次第に演劇化し、能と狂言に分化」(同上)するが、①③⑥⑦⑨は、まさに、点線部の「申樂」である(『日国』は、④として立項する)。「能と狂言」を含みもつため、③「申樂ノ能ノ本」で能を、⑨「申樂ノ時ヲカシ云ヲ云ハ狂言」のごとく「ヲカシ」と限定することで狂言をさすこと

もあつた。しかし、能と狂言では、能が主として受けとられることが多かった当時の事実を反映し、①は能について「舞ウ」ことを「クルウ」と表現し、⑥は「近江ブシ」「大和ブシ」で「近江申樂」「大和申樂」のそれぞれの能の流派・特性としての音調をさしている。⑦も「申樂」で能をさし、能の詞章「伊勢ヤ日向ノ神也ト誓ヒハ同シカルヘシ」に言及している。一方、②④⑤⑧は、「能」で能だけをさし、⑩は「ヲカシ」で狂言だけをさしている。

「申樂」「能」「ヲカシ」に関する清原宣賢のことばのゆれは、一五二七〜八年当時の申樂語彙の使用の現状としても貴重であるが、先行抄の一つ『日本書紀纂疏』が、①について 疏云俳優家語曰(略)侏儒戲二前一故俳優謂レ戲也(後抄本二12才引用)

④について 疏云庶玉篇曰居歎切闇也(後抄本二21才引用)

⑧について 疏云(略) 今按本朝大嘗祭時宮門之南立三盾戈一蓋神世之遺風(後抄本三24才引用)

など漢籍や故実に範を求めているのに対し、右のように能狂言に言及し、聴講者も共有するであろう体験・知識にうったえかけて説明しているところに、講者宣賢の実学性が認められる。

③については、たとえば、世阿弥自筆能本における、

⑪ ヲカシ シカくくく (表章監修・月曜会編『世阿弥自筆能本集』 難波梅 8頁)

⑫ ヲカシコトハシカくく (松浦 68頁)

⑬ ヲカシ シカく (阿古屋松 77頁)

⑭ ヲカシ フシキノ御事ニテ候 (略) シカくく (布留 86頁)

など、間狂言(ヲカシ)のセリフを略記した部分をさしており、宣賢は、「シカく」を「云々」と記した「能ノ本」を実際見ていたから、このように言えたのである。

また、⑤は、能「大蛇」(観世信光作。寛正六年(一四六五)九月、一乗院の四座立合猿楽で観世が演じた「出雲トツカ」が本曲か。宝生・金剛・喜多流現行曲)をさしていると思われる、この能を何かの折に宣賢が見たことがあるからこそ、「能にするによく合たぞ」という感想が洩らされたのである。

なお、⑨の「ヲカシ云ヲ云ハ」は、「ヲカシ云ハ」の誤りではない。「ヲカシ云」として、間狂言のセリフが入ることを示す能本があり、それを念頭に入れた発言である。

### 三 清原宣賢講『日本書紀抄』は、漢和の智力の総合的融合と内面化が特徴

清原宣賢講『日本書紀抄』の講義内容を、事項的に分類

していくと、当時の辞書の分類(部門)で言えば、

天地(乾坤)・時候(時節)・草木・人倫・支体・畜類(気形)・財宝(器財)・衣服・食物(飲食)・言語(言語進退)・官位・名字(人名)・数量

など多岐全般にわたり、儒学(漢学)の家の出である宣賢が、歌学を含めて和学における自己の力を試す場として——漢和の智力の総合的融合をめざして、『日本書紀』神代巻を意識し、その実践・教育として日本書紀講にのぞんだことが確認できる。

⑮ 蛇ノ尾ニ有タ劔ハ熱田ノ御神体テ候 此ウツシカ宝劔ノイヤサデハナイ 神武天王ヘ夢中ニマイラセタ劔共申ソトレテマリ何レニ安徳天王ノ西海ヘ御沈有タ時海ニシツンタソ 神代以来カワラヌキス付ヌハ神璽チヤソ(一79オ)

は、古辞書の部門で言えば「財宝」(器財)に分類可能のものであるが、手控(先抄本)51ウ(後抄本)一22ウには、傍線部への言及はない。当日の講義の流れで、講者宣賢の内面に蓄えられた事実認識が組みあわされて解釈として示されたものである。⑮の傍線部以外は、すでに(先抄本)に吉田兼俱講の引用として出ており、それを今回の講義で伝えるのは、吉田神道説をわが実子で吉田家後継者の吉田兼右(一五一六〜七三)のために擁護するという役割にも

かなう行為であるが、一条兼良が（纂疏）で一切触れていない「安徳天王ノ西海へ御沈有夕時海ニシツンタソ」と言明することには、宣賢の覚悟のほどがうかがわれる。

このことは、『平家物語』にも、

⑩吾朝にハ神代よりつたハれる靈劍三あり 十つかの劍あまのはやきりの劍草なきの劍是也 十つかの劍ハ大和國いそのかミ布留ノ社におさめらる あまのはやきりの劍ハ尾張國熱田の宮にありとかや 草なきの劍ハ内裏にあり 今ノ宝劍是也 この劍の由来を申せハ（略）たとひ二位殿腰にさして海にしつみ給ふともたやすくうすへからすとて（略）いのり申されけれどもつるにうせにけり（略）素戔嗚の尊にきりころされたてまつし大蛇（略）人王八十代の後八歳の帝となて靈劍をとりかへして海底に沈ミ給ふにこそ（略）人間にかへらさるもことはりとこそおほえけれ（覚一本卷十一 龍谷大学善本叢書13 四311～325頁 傍線は筆者）

と記され（語られ）ているので暗黙の了解事項であったかもしれないが、三種の神器が一つ欠けても皇位継承が出来ないとされていたこともまた事実であり、このあたりをどう解釈して聴衆に伝えるかは、講者の責任の負い方にまで及ぶ問題であったと思われる。

現代の部門ならば考古学・地質学に入れられるものとし

て

⑪是マテハ海陸カ一テ有タテ候ヨ ヒヘノ山ノ横川ナト二ハ今モ石ニカキカ取ツイテ有チャソ（二41オ）

が、あげられる。これは手控（後抄本）三41オに出、さらにさかのぼると（先抄本）77ウにもあり、吉田兼俱抄よりの引用ではあるが、兼俱の「昔ハ此世界海中也 比叡山マテモ潮サセリ」という認識は、宣賢の叡山での実見に裏うちされ、「貝」ではなく「カキ」（牡蠣）という具体的な名として内面化されている。しかも、「有ソ」ではなく「有チャソ」の文末終止は、宣賢の確信の高さを示している。

民俗学に関わるものとして、

⑫雷カナツテ茶カ芽ソ 雷ノヲソイ時ハ茶ノ為ニ大鼓ヲ打ト云トカアルソ（一25ウ）

⑬鳥カ内へ入タハカラスナキカ悪ワナト云ヤウナコトヲ祓ウソ（一88ウ）  
などがある。

⑭は、（先抄本）一19ウで宣賢の見識によりつけ足されたもので、（後抄本）一21ウにも引き継がれているものである。（後抄本）では、

⑮雷ハ陽気ヲ得テ春声ヲ発ス 声ヲ発セサレハ万物生長セス 花ノ遅クサク時大鼓ヲタ、クハ雷ヲ似セテ花ヲサカセンタメ也

のごとく、「茶」ではなく「花」と記されている。これを宣賢が講義の時に「茶」と換えているのは、前段で「左旋右旋ハ茶磨ニテ心得ヤスシ（略）アラ茶ニマワスト云是也（略）左ヘマワセハ茶カヲリスシテ右ヘマワセハ子カ生スル也」（一21才）と「茶磨」「茶」を例にもつてきている流れからであるし、中世の茶の愛好を考えると納得のいく例示である。新芽をつんで新茶とするのであり、宇治あるいは柗尾で宣賢自身、春雷が遅い——つまり雨の少ないため茶の成育に必要な湿度が得られない時に太鼓を鳴らす民俗行事を実際に見た経験がここのことばとなっていると見られる。なお、両足院本が「花」を「茶」と誤写した可能性は、〈図1〉に示した異本全てが「茶」であるから、想定する必要はない。

⑲は、〈先抄本〉55才〈後抄本〉二30ウに引用された〈纂疏〉「鳥獸之災如下聽鴉鳴襍厭及野狐蠱惑等上」の一部を和らげた体裁をとるが、「鳥カ内ヘ入タハ」は宣賢の新たに補った事例である上、民間において祓の契機となることが心理的な強い動揺を表わす「終助詞ハ」（表記としてワもある）をともなった日常口語で再現されており、宣賢の内面化がうかがわれる。

古典文学に言及したものととして、

⑳伊勢物語ニトカモナキ人ヲウケエハ忘草ヲノカニソヲ

フト云ナル（一56ウ）

㉑源氏物語ニモウケイトアルソ（㉒に連続）

㉒坂上ノヲクラカ哥ニアマサカルヒナニ五年スマイシテ都

ノテプリ忘ラレンスルトヨウタ（二19ウ）

㉓友ノ宮ツコ心アラハ此秋ハカリト平家ニ云タヤウニソ

（二46ウ）

がある。㉑㉒は、神代卷「第五 瑞珠盟約ノ段」の本文「誓・夫・誓約之・中」に関する注釈部分であるが、〈先抄本〉〈後抄本〉の該当部分に同趣の文章が見られず、講の際に、宣賢によって補われたものと考えられる。㉑は『伊勢物語』第三十一段（岩波古典文学大系 131頁）、㉒は『源氏物語』藤袴（岩波古典文学大系 99頁）の本文に基づく言及であるが、『伊勢物語』の本文は正しくは「つ、みもなき」である。

宣賢は、大永二年（一五二二）五月五日開始の三条西実隆の『伊勢物語』講に参列して文語体の聞書——『伊勢物語惟清抄』（天理図書館蔵）を作成しており、その成果が、大永八年五月二十三日に清書が完了した両足院本『日本書紀抄』の祖本（〈図1〉の原〈日本書紀抄〉）に反映された宣賢の講義において、具体的に生かされてきたわけになる。『源氏物語』については、宣賢は、実隆の息子三条西公条の『源氏物語』講を聴いて『源氏帚木注』を残しているが、

『源氏物語』についても三条西実隆の『細流抄』や一条兼良の『花鳥余情』を便りに独学することも可能で、この方面への造詣も深かったと思われる。

②は、『万葉集』巻五所収880「阿麻社迦留 比奈尔伊都等世 周麻比都々 美夜故能提夫利 和周良延尔家利」(岩波古典文学大系 二92・93頁)の山上憶良歌に関する言及、③は、『平家物語』巻第六「紅葉」の「殿守のとも」のミヤつ子朝きよめすとて是をことくくはさすて、けり」(覚一本 龍谷大学善本叢書 二357頁)に関する言及である。ともに、(後抄本)三17オ・三46オ、さらに遡つて(先抄本)65オ・75オに同文が載せられ、最終的には吉田兼俱講月舟寿桂聞書(天理図書館蔵 兼俱自筆本)に言辭を遡らせることができる。つまり、宣賢の実父である吉田兼俱が「夷曲」<sup>ヒナフク</sup>「狗人」<sup>イヌヒト</sup>との連想から「都の手ぶり」「とものみやつこ」に言及したものを、宣賢自身もよしとして積極的に生かしてきた部分であると言える。②に関しては、つつ↓して、えにけり↓れぞする、山上↓坂上、③に関しては、点線部の文芸的依拠となった『拾遺集』十六「殿もりのとものみやつこ心あらはこの春はかり朝きよめすな」との混同が見られるが、一条兼良が『纂疏』で言及していないことを吉田家説として前面に押し出そうとする宣賢の姿勢が露わである。

第二節・第三節を通して、清原宣賢の『日本書紀』神代巻講をもとに、清原宣賢自身の日本書紀受容のあり方を考察・報告した。宣賢の受容のあり方は、(先抄本) (後抄本)を基に京都や越前一乗谷・能登でなされた宣賢講を聴講した公家・僧侶・武士たちの中世(室町期)における日本紀の受容とも深くかわっていたはずである。能狂言に関する言及も中世の芸能・文化のあり様と連動していたと思われる。

次節では、時を少しく飛んで、戦国時代の日本書紀受容について述べたい。

#### 四 世界——ヨーロッパの宣教師は、いかに『日本書紀』神代巻を受け取ったか

##### 四・一

清原家は、宣賢より業賢、業賢より枝賢へと代を重ねるが、枝賢(一五二〇〜九〇)の代にヨーロッパよりキリスト教(カトリック)が伝来する。

戦国時代に日本にきたポルトガルなどイエズス会のヨーロッパの宣教師たちが、『日本書紀』に対してどのような把握をしていたかについて考察すると、面白い現象が指摘できる。

まず、『日葡辞書』(一六〇三年正篇、〇四年補遺篇刊)。

岩波書店刊『邦訳日葡辞書』に拠るが、必要にあたっては  
原典影印を併用)では、「日本紀」という語で立項され、  
「歴史書」という把握はなされていない。

⑳ Nifongui. \*日本の開闢に始まって天皇の時代に至るま  
で、およびそれから今に至るまでの日本の事が書かれて  
いる書物。

傍線部の原文は「Livro em que eſtão eſcritas as couſas  
de Japão」で、「歴史書」を意味する「Hifloria」という語  
が用いられていない。

一方、『太平記』については、  
㉔ Tafeiqi. \*日本の歴史書の二つ。

と、原文は「Hum liuro de hiflorias de Japão」で、「歴  
史書」という把握が明確になされている。『日葡』には、  
『平家物語』の立項がないが、一五九三年刊『天草版平家  
物語』には、

㉑ NIFON NO COTOPA TO Hifloria no narai xiran to  
FOSSVRV FITO NO TAMENI XEVA NI  
YAVARAGVETARV FEIQE NO MONOGATARI (表  
紙タイトル)

㉒ Cono ychiquannua Nipponno Feigetoyū Hifloria to,  
Morales Sentengasto, Europano Eſjopono Fabulasuo  
voju mono nari. (総序)

のごとく、タイトルと総序に「Hifloria」である旨が大大  
的に謳うたわれている。

これは、中世のヨーロッパ歴史学に基づき、平清盛（一  
一一八〜一一八二）や木曾義仲（一一五四〜一一八四）・  
源義経（一一五九〜一一八九）の生きた時代のことを記し  
た『平家物語』や、後醍醐天皇（一二八八〜一三三九）や  
足利尊氏（一三〇五〜一三五八）の生きた時代のことを記  
した『太平記』は、「歴史書」と認定したのであり、神代  
巻という神話の世界を含む『日本書紀』は、「歴史書」と  
把握できなかつたことを示している。

#### 四・二

通辞パテレンとしても大活躍し、日本文学・文芸・有職  
故実・社会事情にも精通していたジョアン・ロドリゲス  
（ポルトガル人。一五五八〜一六二九）は、『日本大文典』  
（一六〇四〜〇八年長崎学林刊）を著わした。その中で、  
西洋のキリスト歴以前の、日本の歴年数表示に、次に引用  
するようにならわめて懐疑的な扱いをしている。

㉓ 日本の帝王と年数

○日本人もまた日本の初と起源を、神、(Camis)の話  
として取扱つてゐて、日本の帝王はその神から出たもの  
だと言ひ、Tenjin xichidai (天神七代)とて天上の神の  
世が七代、Gijn godai (地神五代)とて地上の神の世が



五代あって、地神の最後の世に日本の第一代の帝王が立ち、年数の計算もこの時に始まるのであって、それ以前に就いては正確な年数の記述もなく、彼等の歴史の記録もないのである。第一代の帝王はわが主キリシト前660年に始まる。支那人がその歴史で言っているのによつて、これより少し前に、支那から日本へ、舟 (Fines) によつて移住が始まったやうであり、又、高麗 (Cora) や、蝦夷 (Yezo) 方面からの移住も、同様に彼等の歴史の上から推論し得るやうである。

○最初に日本に移住したものであらうと、日本人が言っている。天神七代は次の通りである。

- 1 Cunicoctachino micoto (国常立尊)。
- 2 Cunisadzuchino micoto (国狭槌尊)。
- 3 Toyocunino micoto (豊斟淳尊)。
- 4 { Vbichino micoto (泥土煮尊)。  
Suichino micoto (沙土煮尊)。
- 5 { Vōvotonojino micoto (大戸之道尊)。  
Vōtomabeno micoto (大戸間辺尊)。
- 6 { Vomotaruno micoto (面足尊)。  
Caxiconeno micoto (惶根尊)。
- 7 { Izanaguino micoto (伊弉諾尊)。  
Izanaminno micoto (伊弉册尊)。

○日本人の言ふところによれば、この最後の二神の Izanami (伊弉册) が男で、Izanagun (伊弉諾) が女であつて、それを最も早い祖先として、それから日本の人民が出て来たのである。これらの神はこの島々に移住し始めた者共の最初の首領であつて、この二神から日本の帝王が出たものと考へられる。地の神と言はれる五代は次の通りである。

- 1 Tenxō daijin (天照大神) Izanami (伊弉册) の女であつて、日本の最初の首領。
- 2 Voxionimino micoto (忍穗耳尊)。
- 3 Foniniguino micoto (火瓊々杵尊)。
- 4 Ficofofodemino micoto (彦火々出見尊)。
- 5 Vaya fuquiauaxezuno micoto (鷓鴣草葺不合尊)。第一代の帝王 Iimmu Tenvō (神武天皇) の父。

キリシト前の年数がこの時から明らかなとなる。

- 660 1 日本の帝王。Iimmu Tenvō (神武天皇)、在位76年、その崩御により帝位が三年間空白、127才で崩御、イスラエルの Iosias 王の時代に即位。

(以下、略) (土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』三省堂刊 845〜846頁)

傍線アの「もまた」は、「日本の帝王と年数」の前に位置する「○支那の年代数と、最も注意すべき若干の事件」の章における、

⑳○支那で正確にして確認された年数の連続が始まる以前の真の年数については、この世界の初とそれが如何にして創造されたかといふことの伝説が物語つてゐて、数へされぬ年月を経過してゐると言はれる。(842頁)  
という記述を承けたものである。

傍線イ・カ・キは、あくまでこの間の<sup>かん</sup>ことは「伝説」としてロドリゲス自身は扱うという姿勢を示したものである。結局、ロドリゲスとしては、傍線ウの立場をとる。一方、「支那」(中国)については、伝説の時代ののちに、「Xino buvo」(周の武王)が君臨し、それは「わが主キリシト紀元前1121年」であることが述べられており、ここから「支那人」の「歴史」が始まるとロドリゲスは把握している。傍線エ・オは、「支那人」の歴史書における日本への言及に触れたものである。

さて、『日本大文典』の訳者である土井忠生博士は、

845頁 (1) Vichinio の誤か。

(2) Sutchirino の誤か。

(3) Votonojino の誤。

846頁 (1) 男女の関係が逆になつてゐる。

という脚注をつけられているが、ローマ字組み版の際の誤植だけでなく、「*nino* → *no*」「*Vo* → *Vo<sup>o</sup>*」という発音の際の微妙な詰め・のびのゆれを反映したものである可能性もある。ただ、846頁(1)の対象本文(㉔点線部)の記述については、『日葡辞書』の「アマノサカホコ」「アマノボコ」の語釈においても「日本の最初の二神、Izanami, Izanagi の神 (Camis) が」と「イザナミ」が先に来ているところから、この順で暗記していたため、最初を男神、後を女神と勘違いした可能性がある。

なお、天神七代、地神五代の呼称について、清原宣賢の講義手控(後抄本)より示すと、

㉔天神七代事

- 第一 クニノトコタチノミコト(一八ウ)
- 第二 クニノサツチノミコト(一八ウ・一七ウ)
- 第三 トヨクムヌノミコト(一二ウ)
- 第四 ウヒチニノミコト(一六ウ)
- スヒチニノミコト(一六ウ)
- 第五 ヲホトノヂノミコト(一九オ)(一六ウ)
- ヲホトマベノミコト(一六ウ)
- 第六 ヲモタルノミコト(一六ウ)
- カシコネノミコト(一六ウ)
- 第七 イザナギノミコト(一六ウ)

イザナミノミコト(一16ウ)

地神五代事

第一 アマテラスヲホムカミ(一29オ)(三2ウ)

第二 マサヤアカツカツノハヤヒアマノヲシヲミ、ノミ

コト(一9オ)(三2ウ)

第三 アマツヒコホニ、ギノミコト(一9オ)(三2ウ)

第四 ヒコホ、テミノミコト(一9オ)

第五 ヒコナキサタケウカヤフキアハセスノミコト(一

9オ)

のようになっていいるから、ロドリゲスの入手した資料の限界もうかがわれる。

⑳の掲載された『日本大文典』は、長崎で刊行されており、日本人信者の目も意識しているのでこの程度におさえられているが、ロドリゲスが国外追放(一六一四年)後の元和六年(一六二〇)にマカオで出版した『日本小文典』では、コンパクト化されたせいもあるが、

㉑(略)そうした頭の最初の人は「神武天皇」とよばれた日本人の系譜はこの人をもって始まり今日にいたる。というの、それ以前に生じたことがはっきりしないからだ。(日笠博司編訳『日本小文典』新人物往来社刊 f.83

頁)

のように記し、「神代卷」への配慮が全くなされていない。

これは、海外での出版という特殊事情を重く見なければならぬであろうか。

ロドリゲスは、日本国内の布教に役立てる『日本大文典』の構成の中に、日本人との共通認識との調和をはかるべく、神代の神々から一〇八代にあたる「Quinjō quōjēi(今上皇帝)」まで(一五八七年時点)の年代の天皇名・在位期間・没年齢までを丁寧に記しており、この状態こそ、「神代卷」受容の一つの姿と見なすことが出来るであろう。

#### 四・三

既に『日葡辞書』を引用することがあったが、実は『日葡辞書』には『日本書紀』神代卷関連語彙がかなり採録されている。

「天神」(Tenjin.)については「\*ある神(Cami)」、「地神」(Gjin.)については「\*地の神(Camis)」と簡単に触れ、「天照大神」そのものについても立項はせず、「天の岩戸」「宝剣」の語釈の際に「Tenxōdjin」という中世に流布した呼称を用いる程度であるから、これらは、キリスト教のイエズス会刊の辞書であるという限定がかかっていると見られる。

しかし、『平家物語』でも『太平記』でも言及する「三種の神器」「宝剣」「くさなぎのけん」「内侍所」については、

③② Sanjuno Jingu. \*日本の国王の宝として、大切にされつゝる三つのの宝物。すなわち、Xinxī, fōgen, naixidocoro. これらについてはそれぞれの条を見よ。

③③ Fōgen. Tacarano gen. \*天照大神 (Tenxōdajin) の劍で、内裏 (Dairi) の所有している三種の貴重な宝のうちの一つ。

③④ Cusanaguino gen. \*神道 (Xintō) で語られている或る劍。

③⑤ Naixidocoro. \*内裏 (Dairi) の或る立派な鏡の名。Sanjuno jingu (三種の神器) と呼ばれる、日本の立派な宝物三つのうちの一つ。

のように、丁寧な語釈をつけている。これは、ヨーロッパ人が「日本事情」としても理解しておかねばならないと強く認識したことに由来しよう。また、神代巻の重要なエピソードである伊弉諾・伊弉冊の国産み神話に関する語も、③⑥ Amano sacafoco. \*一種の長い杖、あるいは槍をいう。ゼンチヨ (genios 異教徒) の物語るところによれば、日本の最初の二神、伊弉冊 (Izanami)、伊弉諾 (Izanagi) の神 (Camis) が、その杖で海底を探り、その杖から落ちた一滴が凝り固まって大地になったという。

③⑦ Amano toboco. \*日本最初の二神。伊弉冊 (Izanami)、伊弉諾 (Izanagi) の神 (Camis) が、海底をかき探る

のに用いた杖。あるいは、槍。

③⑧ Mitono macubai. \*最初の神々 (Camis) の肉体的結合⑬すなわち、夫婦の交わり。

の)とく説明されているし、天照大神の岩戸隠れに関する語も、

③⑨ Amano yuato. \*そこに天照大神 (Tenxōdajin) が身を隠し、そのためにこの世が暗黒になったある岩の戸。神道 (Xintō) の語。

の)とく説明されている。また、

④⑩ Axica. \*すなわち、Tunogunmu axi (角ぐむ葦) ある小さな葦の芽。神道 (Xintō) の語。

④⑪ Conton. \*例、Conton nibun. (混沌未分) 天と地とははつきりと分れて生成し出現する以前、すなわち、世界の生成以前。神道語 (Xintō)

は、『日本書紀』神代巻本文の語であるが、「神道 (の) 語」と注記しつつも、日本の文芸への理解を深める語彙としてここに説明されている。

『日葡辞書』の採録したこれらの語は、中世日本紀の世界を構成する語群であり、ここでもまた、イエズス会のヨーロッパ人たちが、当時の『日本書紀』神代巻受容と共通認識をもとうとした姿勢がうかがわれる。

ただし、日本語の文法書や日本語の辞書のレベルを越え

て、信仰問題となると、『日本書紀』神代巻の世界を包括する「神道」と「キリスト教」は対立せざるをえない。そのことは、次節で扱う。

## 五 不干ハビアンの世界

『日葡辞書』に所載されている楽の曲名や能の謡い本に出るきわめて特殊な語彙につき、

小林千草二〇一二・三『謡抄』と日葡辞書の語釈をめ

ぐって 〔高砂〕「老松」「難波」「呉服」より〕〔湘南文学〕第四十六号)

において日本人修道士ハビアンの存在を想定しておいたが、『日葡辞書』における中世日本紀の世界を髣髴とさせるような語群にも、不干ハビアンの存在を考えておきたい。「天のさかほこ」「天のとほこ」における「イザナミ、イザナギ」という言い方も、男女神をとりちがえた結果ではなく、二神連続させる場合にはこの形の方が言いやすい（濁音を有する語が後に来た方が言いやすい）ためであったと解釈するなら、『日葡辞書』のこれらの語群にハビアンが関与していたとしても問題にはならない。

イエズス会のスペリオールスたちは、『日本書紀』神代巻に語られているようなことを神話として、「歴史」とは認めなかった。ところが、『日本書紀』神代巻を、「神道」

という日本における一宗派の原典として見るに際して、神話のもつ「人間らしさ」を思いきり攻撃する方向に出た。それが、不干ハビアンがスペリオールスの命を受けてキリシタン護教書として著わした『妙貞問答』に明らかである。慶長一〇年（一六〇五）完成したと推定されるこの本には、

〔42〕次二伊弉諾尊伊弉册尊（略）矛ノシヅクカ大日ト云フ文字ノ上ニ落留テ淡路嶋ト成テ其ヨリ国土弘マルトハ申サフラフゾ 先思フテモ見玉ヘ 此下心ナラスハ鋒ヲサシヲロシテ此大海ノ中ニ国トナルヘキ下地ハアルマシキカト云ツテカキサグルト云ハ踈ナル叟ニテ侍マジキヤ 国土ヲ造リ開クヘキ程ノ神ナラハ水ノ底ニ其下地ノアリナシニハカ、ハラズ 其上又其下地ノ有ナシヲハカキサグラストモ知スンハ有ヘカラス 然ニ先此瓊矛ヲサシヲロシタルト云コトヲ沙汰スルコト其下心ニ御身トハラハカ中ニテサヘモ面ハユク云ハレサフラハネハ申マテモナシ鋒トハ何シタ、リトハ何トアル叟ヲハ推量リ玉ヘ（神宮文庫蔵本 中27ウ〜29オ）

のように、『日本書紀』神代巻の本文「伊弉諾伊弉册尊立ニ於天浮橋之上ニ共計日底下豈無レ國歟廼以三天之瓊矛ニ指下而探之是獲ニ滄溟ニ其矛鋒滴瀝之潮凝成ニ二嶋ニ」中の語（〔42〕傍線部）が次々とあげつらわれている。

永祿一〇年吉田兼右講某人問書『日本書紀問書』に依拠

しながら、学術的解説とともに展開するこのあげつらい (B 380 ~ 383 頁参照) は、現代の評論家たちに不干ハビアン  
の思想家としての浅才・非才の露見として低く評価される  
ものであるが、イエズス会の「ねらい」を効果的に表現し  
ていくには、このような方法しかなかったのである。

しかし、ここでの方法論は、棄教後のハビアンが長崎奉  
行の勧めで元和六年(一六二〇)に刊行した破キリシタン  
書『破提字子』では、キリシタンの神話的部分であるマリ  
アの処女受胎に関して、同じような口調の攻撃を可能にし  
た。

④3 又ジヨゼイフサンタマリヤハ一生不嫁ノ善人ナルヲ父母  
トシゼズキリシト誕生ト云 是レ何ノ至善ソ 夫婦別ア  
リトテ面面各各ノ嫁婚ハ人倫ノ常也 常ニ反スルヲハ  
カエツ 却テ惡トス 惡ト云ハ道ニ外ル、ヲ云フ 若天下ノ人  
倫悉ク嫁婚ノ義ナクンハ國郡郷里人種ヲタチ亡ビシ外  
何ヲカ待シ 然ル時ニハ常ノ道ハ善ニシテ此外ハ不善ナ  
ル事明白也 (京都大学図書館蔵本 36オウウ)

『妙貞問答』の時は、伊弉諾・伊弉冊二神が人間のごと  
く国を産んだことを激しく攻撃したのに対し、ここでは、  
処女受胎とは言えマリアという人間から生まれたキリシト  
の神聖を否定するのではなく、「夫婦別アリトテ面面各各  
ノ嫁婚ハ人倫ノ常也」として、むしろ、「一生不嫁」の非

人間性を攻撃する方向に出ている。なぜなら、「どうすい  
ばあてれ・ひいりよ・すぴりつーさんと」という三位一体  
の一つであるヒイリヨ(子イエズス)段階では、「キリシ  
トモ因位ノ處ハ本ヨリ人間ニテ」(『破提字子』10オ)な  
のだから、これをたたいてもそれほど効果があがらないか  
らである。そこで、むしろ、「一生不嫁」が「人倫ノ常」  
「常ノ道」に反することを倫理的にたたいているのであ  
る。イエズス会に「二十餘年ノ春秋ヲ送」(『破提字子』  
序) ったハビアンがキリスト教をよく理解していたからこ  
そ出来た見事な攻撃の角度変更である。

それとともに、「人倫ノ常」をもつて「至善」とみなす  
ということとは、人間らしく「生きた神々の物語である  
『日本書紀』神代巻をひるがえつては「善」とする思想に  
つながっていることを思い出したい。イエズス会のスペリ  
オーレスの命に従ってしかたなくやみくもに攻撃した『妙  
貞問答』の補いを、ハビアンはこの『破提字子』でしてい  
るのである。それは、寿命を意識し始める年齢に至ったハ  
ビアンの精神的な自己補填と言ってもよい。

## 六 おわりに

以上、清原宣賢の能狂言に対する造詣の深さと実体験に  
もとづく言及がその『日本書紀神代巻』の講義に見られる

ことを示し、また、ヨーロッパからやって来たイエズス会の著作である『ロドリゲス日本大文典』『日葡辞書』を通して、ヨーロッパの学問に裏打ちされたイエズス会の『日本書紀』神代巻的な部分の受容を報告してきた。歴史書ではなく、神話として見るかぎりは問題のない受容であったが、「神道」という一宗派の神典として見る時、そこに批判・攻撃が生じたことを、不干ハビアン（Havrian）の護教書『妙貞問答』を通じて確認した。また、同じハビアンの棄教後の破キリシタン書『破提字子』においても、同じ切り口で、キリシタンの「マリアの処女受胎」が攻撃されている様子も見た。

中世日本紀の世界

中世ヨーロッパ世界

『日本書紀』の室町期受容と「世界」をテーマにした本稿のしめくりとして、きわめて大ざっぱながら、次のようなまとめを示しておきたい（図2）参照。

中世日本紀の世界は、「文化・伝承としての神代、神々」「信念としての神代、神々」「信仰としての神代、神々」は存在したが、吉田神道説が吉田兼俱によつてはなばなく打ち出され、清原宣賢・吉田兼右などの学問的展開・布教活動はあったものの、「思想としての神代、神々」の確立は、江戸後期～幕末～近代をまたねばならなかった。一方、中世ヨーロッパ世界は、「文化・伝承としてのギリシャ・ローマの神々」「信仰としての神・精霊・キリシト」「思想

〈図2〉

文化・伝承としての神代、神々

信念としての神代、神々

信仰としての神代、神々

文化・伝承としてのギリシャ・ローマの神々

信仰としての神・精霊・キリシト

思想としての神・キリシト（近現代に至る）

思想としての神代、神々（江戸後期～

幕末～近代）

としての神・キリシト」が存在し、「思想としての神・キリシト」は近現代に至るまで発展深化をつづけている。

〔図2〕中、点線で囲った部分こそ、国学・勤王思想・国家主義と深く関わる大きなテーマであろうが、筆者の力の及ぶところではない。ただ、小さな風穴とでも言うべきものとして、勤王思想に関わる

小林千草二〇一二・三「幕末の『太平記』受容 有馬新七の場合」(東海大学日本文学科『日本語・日本文学 研究と注釈』第二号)を發表したことを報告して、本稿を閉じたいと思う。

## 注

- (1) 一九七五年一〇月〜一九九〇年九月發表分を収録。
- (2) 一九七一年八月〜一九九三年三月發表分を収録。
- (3) 一九九二年一〇月〜二〇〇一年三月發表分を収録。
- (4) (先抄本)とは、天理図書館蔵『日本書紀神代巻抄』(二冊 清原宣賢自筆)をさす(詳細は、A・C参照)。(後抄本)とは、天理図書館蔵『日本書紀抄』(三冊 清原宣賢自筆)をさし(A・C参照)、天理図書館善本叢書『日本書紀纂疏 日本書紀抄』に影印が収められている。
- (5) 旧年調査した折の原本写真に拠るが、のち臨川書店より『両足院蔵日本書紀抄』として影印が出されている。

Cは、筆者による翻刻である。

- (6) 天理図書館蔵原本写真に拠るが、のち、影印が注4傍線部に収録された。本稿では、(後抄本)引用の状態を示す。
- (7) 岩波書店刊『日本古典文学大辞典』「大蛇」項参照。
- (8) 中世古辞書数本の分類を参照。
- (9) 斯道文庫蔵百二十句本平家物語にも同趣本文あり。
- (10) 両足院本における行間注は、全て書写者和仲の書き入れと見られる(C220頁参照)。
- (11) 清原宣賢自筆の『伊勢物語語惟清抄』25才(天理図書館善本叢書)には、「ツミモナキ」となっている。
- (12) 成立事情等については、A参照。
- (13) 「坂上」と書いて、「やまのうえ」と読んだか、あるいは「さかのうえ」と称したか、中世文献の様相は今後の課題である。
- (14) 後の部分で濁点を付した例もある。
- (15) 原文「Copula」を「carnal coupling」と解して私訳したもので、『邦訳日葡』の訳とは小異する。
- (16) ここでは、(後抄本)一19オ〜ウから引用。
- (17) 岩波思想大系『キリシタン書 排耶書』所収国字本『どちらいなきりしたん』22頁の表記を引用。